

# 第5回 人と自然の共生国際フォーラム 開催報告

「第5回人と自然の共生国際フォーラム」は、2011年10月1日にフィールドワークを、10月15日にフォーラム本体を開催しました。あわせて、リノモ車内に出演者や活動団体のフォーラムテーマに対する意見を掲示するとともに、さらに広く皆様から意見を募集し、フォーラムへの議論につなげる「リノモ車内会議」を開催しました。暮らしや生き方を問い直し、自然と共に生きる新たな社会づくりに向けて、これからどのように行動すべきか、様々なプログラムを通じて、多くの方々の参加と交流により参加者みんなで考えました。

テーマ：持続可能な社会を目指して、理念から行動へ、今変わる時  
～暮らし、生き方を語り直し、見つめ直す～

10/1  
(土)

## ●フィールドワーク

場所：あいち海上の森センター、豊田市里山くらし体験館「すげの里」

10:00—16:00

「持続可能な地域づくり見学・交流ツアー」

## ●フォーラム本体

場所：地球市民交流センター（愛・地球博記念公園内）

9:55—10:00

開会宣言

10:00—11:45

グループディスカッション

- 現地福島からの報告：岩崎 真幸
- 分科会1「これからの生き方・社会のあり方」 ファシリテーター：稲村 哲也
- 分科会2「新たな循環型社会を目指して」 ファシリテーター：高野 雅夫

13:45—14:00

開催の式典

14:00—14:30

基調講演

「つながりという価値：震災後にあらためて考える」  
講師／阿部 健一

10/15  
(土)

14:30—16:15

パネルディスカッション

- コーディネーター：川井 秀一
- パネリスト：阿部 健一、稲村 哲也、高野 雅夫、空木 マイカ
- コメンテーター：マリ クリスティーヌ

16:15—16:45

二胡の演奏

16:45—17:00

フォーラム宣言・閉会式

17:30—19:00

交流会

10:00—16:00

ポスターセッション・工作等体験

## リニモ車内会議

フォーラム本体に先立ち、9月27日から10月2日まで、名古屋市名東区の藤が丘駅から豊田市の八草駅までを結ぶリニモ（愛知高速交通）の車内広告を独占利用して、フォーラム出演者や活動団体のフォーラムテーマに対する意見を掲載し、これらの意見やフォーラムテーマに関する意見を募集する「リニモ車内会議」を開催しました。車内に掲示した16件の意見と、皆様からお寄せいただいた33件の意見等は、フォーラム当日に会場に設置された新聞紙で作られた大きなオブジェに掲示し、多くの参加者の関心呼びました。



## フィールドワーク

フォーラム本体に先立ち、10月1日に、実際に活動している現場の話を聞き、体験交流を行う「持続可能な地域づくり見学・交流ツアー」を実施し、38名の参加がありました。あいち海上の森センターでは、海上の森の活動や取り組みについての話を聞きました。豊田市（旧足助町）にある豊田市里山くらし体験館「すげの里」では、薪ボイラーや小水力発電などの自然エネルギーを利用した施設の見学や、竹林整備体験を行いました。地域で活動されている「新盛里山耕流塾」の皆さん等と交流し、フォーラムの議論につなげました。

八草駅 【出発】



あいち海上の森センター（瀬戸市吉野町）  
海上の森の会による活動紹介と幼児森林体験フィールド見学



豊田市里山くらし体験館「すげの里」（豊田市新盛町）  
施設の見学と竹林整備体験  
意見交換、交流



八草駅 【到着】【解散】



## 現地 福島からの報告



**岩崎 真幸 (いわさき まさき)**

みちのく民俗文化研究所 代表  
福島県相馬市生まれ。日本民俗学を専門とし、民俗誌論、東北の山岳信仰、屋敷林を研究テーマとしている。福島県民俗学会副会長。

私が住んでいる相馬地方は、明治維新まで700年ほどの間相馬家の支配のもとにあった、非常に長い歴史を持った土地です。歴史があるだけに強い連帯意識を持っている地域で、「相馬野馬追」という祭を通し、今でも自治体を越えた緊密なつながりがあります。しかし今回の災害は、そうした連帯感などを否定し、寸断してしまったことになり、自治体そのものがこれから成り立つのかどうか、本当に深刻な問題を抱えています。

私はこの地方の自治体の歴史を調査執筆する仕事をしていますが、震災当日も調査をしていました。揺れが尋常ではなく、慌てて外に出ると、ブロック塀がバタバタ倒れ、瓦が雨のように落下してきました。その後30分ぐらいしてから、津波が押し寄せました。

相馬市では460人ぐらい、南相馬市では700人近い方が亡くなり、南相馬市ではいまだ行方不明の方がたくさんいます。住宅もたくさん流され、インフラも壊滅的な被害を受けました。私はJR常磐線を利用していますが、いまだに不通です。そしてさらに追い打ちをかけるように原発事故が襲ってきたわけです。

私の家では、3月11日の地震のあと3月18日ぐらいまで、共同アンテナが壊れ、地元局のテレビは見ることができませんでした。新聞は来ません。光電話を使っていましたが全く通じない。当然インターネット、メールも不通で、ガソリンもない、灯油もない、食料品が入ってこない。本当にどうしようもない状態で、原発で重大事故が起きたらいいということだけが伝わってきていました。

こういった混乱状態の中では、通常の情報収集というのは絶対に無理だと思います。しかし、ただ座して待つのではなく、それぞれの人が積極的に情報収集をするということが必要だということが分かりました。

わが家は4人家族ですが、隣の南相馬市から避難してきた妹夫婦とか、南相馬市博物館の若い独身の職員たちがうちに集まってきました。結局10人家族になったんですけれども、それぞれが情報を自分で収集して、持ち寄って、どうしようかと方策を考えました。生の情報を持ち寄ることは非常に心強かったと思います。

南相馬市は、市長が3月17日に、避難区域以外の市民も含めて、全市民に避難を勧めました。危ないからとにかく逃げろと。しかし、何がどう危険なのか、どうそれを保証するのか一切示さないままの勧めでした。地域病院の看護師などの嘱託職員、臨時職員を全て雇い止めしてしまいました。これが復興・復旧に向かうときの非常に大きな足かせになり、市民の世話をする職員がいない、人材が不足してしまっているわけです。

除洗ということが最近よく言われています。明らかに生活圏の放射能は、除洗作業によって減少しますが、ただ、誰もが放射性物質はなくなるわけじゃないよねと、非常に醒めた見方をしています。ある意味ではどこかに、お付き合い、気休めという意識があります。

福島県は森林が多く、田や畑、屋敷林や里山もたくさんあります。それをどうするか。キノコ、山菜を採り生活している人もいます。それ

はどうやって保証するのか、分からないことばかりです。

この前、学校の除洗の様子を見ましたが、高圧洗浄機で洗い流すと線量はかなり減ります。しかし、洗浄した水は、隣の民家の下水に流れ込んでいるわけです。そここのところはまったくニュースにはならないわけです。皮肉なことに、マイクロシーベルトとか線量計、セシウム、ストロンチウム、こういった特殊な専門用語は、もう子どもからお年寄りまで知っている、福島県の共通語になってしまいました。

こういった、まき散らされた放射性物質の中で、私も含めて誰もが生きています。気にならないはずはないが、気にしないように振る舞っているわけです。でも、京都の大文字焼とか、大阪の橋梁の鉄骨の話、愛知県の某市の打ち上げ花火のような放射能汚染を忌避するニュースは、仕方がないから前向きに生きようという、私たちの心構えを非常に萎えさせてしまいます。風評被害について、私どもは非常に強く実感したわけですが、実害以上に心を萎えさせるということを知りました。

除洗しても放射性物質がなくならないならば、そこから逃げ出せばいいのではないかと、土地を捨ててしまったりいいのではないかとこのことを言う人もいます。しかし、大方の人はあきらめずに、やっぱり戻ることを切望しています。故郷を捨てるというのは、そんなに容易にできることではありません。生まれ育った土地というのは、自己の感受性を育んだ土地で、単に住まいがある所という意味ではないんですね。

暮らしというのは、おそらく「人」と「自然」と「歴史」がほぼよく支え合って、安定した形をとっているという所に求めるのではないかと思います。暮らしやすさ、心地よさというのは、人と自然が妥協したり、屈服したり、あるいは克服するという歴史を繰り返して、ほどよい感性をそこに見つけ出す。つまり、そうした結果の落ち着き所が故郷だという気がします。故郷の発見には、世代を超えるような非常に長い時間がかかっているように思います。そういった関係を簡単に断ち切ってしまった原発事故ですけれども、何とかこれを克服し、落ち着き所を取り戻さなければならないと強く思います。

それから自治体ごとに復興計画がつくられています、自治体の枠を超えて共通した地域文化の単位ごとに、将来を設計するという考えがあってもいいのではないかと、という気がします。

この地方にあった知識とか知恵が流れようとしています。今まで蓄積してきた大事なもののだけは何とか確保したい、という気がしています。



## 【分科会1】 「これからの生き方・社会のあり方」

ファシリテーター

稲村 哲也(愛知県立大学 教授、同多文化共生研究所 所長)

《グループ発表》

【A】日ごろの暮らしのなかからいろいろ思うところを前提として、ローカルなところ、できることから環境にいいことを始めて、それが最終的にグローバルな環境問題へと前向きにつながっていかばいい、というふうにとまりました。

【B】子どもたちとおじいさん、おばあさんとがつながれば、自然のことについてすごくいろいろな情報を得ることができて子どもたちも喜びます。また、愛知万博、COP10、そして今度はESD(持続的な発展のための教育)に関する国際会議と、愛知県はすごく恵まれているのに、その会期中や前後は情報が豊富にあるのに、その狭間の時期には関心が落ちる、波があるような感じがするという意見が出ました。それから、環境の活動しようとする人が入手したい情報、環境活動している人が発信する情報が、そこにに行けば得られる「プール」のようなものをつくれれば、もっと活動が円滑にいくのではないかという意見が出ました。

【C】とにかく生物の命を大切にしましょう、ものを大切にしましょう、それから昔の知識を大切にしましょう、要するに、おじいちゃんやおばあちゃんの知識を大切にしましょうということ。単なる遊びのなかにも昔は生活上の知識が入っていました。そんなことを大切にしましょうということでもとめました。

【D】今の社会は隣に誰が住んでいるかも分からない。子育てを手伝うとか、近所の人に声を掛けたりして、つながりをつくっていくことが大事ではないかと考えました。また、エネルギーについては、電気に頼りすぎていて、電力会社に今、根本的な問題があるのではないかとということも話し合いました。やっぱり放射能の問題を解決しないと根本的な解決にはならない、子どもたちによりよい環境を残していくためにはどうしたらいいかということも話し合いました。

あとは、一人一人が、お金で手に入らないものを大切にしてい

く必要があるのではないか、そうすることによって幸せが見つけられる。生き方を変えなくてはいけないということで、環境にしろ、エネルギーにしろ、一人一人がまずできることから気付いてやっていくことが大事だ、ということを話し合いました。

万博や生物多様性、ESDはすべて都市の発想であって、地方と都市の格差をいかにして埋めていくか、地方で自立できることは自立してやっていくことが大切、都市は地方を土台にしてはい上がっているけれども、やはり都市もちゃんと地方のことを考えていかなければならない、ということも話し合いました。

《ファシリテーターまとめ》

【稲村】 A班は日常の暮らしのなかにも重要なものを見つけて持続していき、そこからグローバルな環境の問題につなげていこうという提言だったかと思います。B班は、世代間の交流ということですね。子どもたちへ伝えることが非常に重要だということ。それから、情報の集積、発信といったシステムがきちんと必要だという非常に重要な提言があったかと思います。C班は、生物、命、もの、すべてをもっと大事にしていく考え方、生き方が大事だということで、昔の知恵のなかにも、あるいは遊びのなかにも生活上、あるいは環境に関する非常に大事な知識が埋め込まれており、今の子どもたちの生活を本当に変えるような仕組みが必要ではないかということですね。それから、D班は、特につながりということが議論されたようです。そして、エネルギー、特に電気に頼りすぎた今の生活を考え直す。それから、生き方を一人一人が変えることですね。そして最後にCOP10やESD、万博というのは大きなイベントであって、都市でなければできないことだが、地方からの発信、地方の重要性にもっと目を向けるべきではないかという意見だったかと思います。

以上のことを私からパネルでも発表したいと思います。午後のフォーラムでお会いしたいと思います。

## 【分科会2】 「新たな循環型社会を目指して」

ファシリテーター

高野 雅夫(名古屋大学大学院 環境学研究科 准教授)

《グループ発表》

【秋生まれ班】 グループディスカッションで一番印象に残ったのは、「コミュニティの力が大切だ」ということです。原発で利便性が増えたが横のつながりが減って、今、見直す必要性が出てきたんじゃないか、上の世代が下の世代に何を残せるのかという話も出ました。それからマスコミ報道について、1つの方向の意見しか出ていないんじゃないかという話も出ていました。

【冬生まれ班】 「価値観を変えていくのが循環社会につながる」「僕たちの世代だけではなく、何世代も子孫へつなげていく」という話をしつつ、一方で、人口減少から「持続する必要があるのか」ということもちょっと提示して、そこら辺を話し合いました。人とのつながりをこれからどうしていくのかも話し合いました。つながるということが循環していくということだと思います。新しいエネルギーをどう対応していくか、メリットはあるけれどもデメリットも付いてくる、ということも話し合いました。岩崎さんの「気持ちが悪える」という話について、福島の方だけでなく、みんなで分かち合おうと話をしました。電気を使わない生活の話もして、「これから子どもたちに教えていく」とか、「体験してもらおう」とか、ただ国に任せるのではなく、僕たちが動いて幅を広げる、情報をただ受け止めるのではなく、情報を選ぶのは自分たちだという話もしました。あとは、社会の在り方を変えていくには、知恵を使って、ちょっと見方を変えていこう、お金だけじゃないと、そういうことも話しました。

【夏生まれ班】 人災、天災をごっちゃにせず、分けて、一体何が起こっているのかという正しい情報を把握することが大事じゃないか。また、「コントロールできる技術とそうでない技術を分けていく必要があるんじゃないか」という意見も出ました。日本と外国の意識の差というのもキーワードとして出てきました。まとめますと、「客観的で正確な情報、事実から、われわれは判断していく必要がある。その判断が正しいかどうかをまた、別の視点から見えていく必要があるのではないか」ということです。

【春生まれ班】 3月11日に何をしていたかから話をし、原発の話になりました。高野先生から「原発がなかったとしても、火力と水力を合わせて、原発があるときと同じ電力を賄っている現状がある」という話をいただきました。原発についてはいろいろと意見が分かれた。「シンプルな生活をしていけばいい」「過去から学んで、未来を作っていく生活がいい」「大量消費、電気をたくさん使っている生活は、意識から変えていかないと変わらない」という話も出ました。「あったらいいな」というキャッチコピーがありますが、裏を返せばそれは、「なくてもいい」、確かにそう思いました。マータイさんが「もったいない」という言葉を広めていきましたけれども、あのときに小泉純一郎さんが「もったいないと思う心と、科学技術が結びつければ、環境問題は解決していくんじゃないか」という話があったということで、私もそう思いました。「心の豊かな生活をしていきたい」という意見でもました。

《ファシリテーターまとめ》

【高野】 皆さんそれぞれ違う話をしているようで、実はみんな同じ話をしているんですね。福島だけの問題ではなくて、これは実は日本国民全体の毎日の問題。福島の人たちが戸惑って迷っていることは、実はわれわれが気にしていないだけ、同じなんです。そういう中で、じゃあ、どうしたらいいのか、どう考えたらいいのかということなんですけれども、たぶん皆さん、それぞれの中に少しずつ答えを持っていると思うんです。それは、専門家が答えを知っていて、それを聞いたらいいという問題では全然なくて、1つの専門分野で閉じる話ではないから専門家も全然分からない。少しずつ持っている答えをこういう場に出していくことで、なんとなく見えてくる。こういうのをたくさんやることでしか、これからどうしたらいいのか分からないのではないかなという思いで、こうやって、やっています。

ぜひ、皆さんの職場とか学校とか地域で、普通の雑談でいいんです、3.11をどう受け止めるか、みんなで話し合ってもらえたらいいなと思います。今の結果は午後のパネルディスカッションで紹介しながら、それをもとに僕のお話をしていきたいなと思います。